「イリ危機」とウイグル人

濱田正美

一八八一年二月二十四日、露清兩國間のいわゆる「イリ危機」を解決するため、セント・ペテルスブルグ條約が調印された。この條約は、その第三條において、「伊犂の居民」に對し、ロシア領に遷居して、その國籍に入る自由を認めていた。當時、イリ谿谷には、タランチ（ウイグル）、トゥンガン（漢回）、シボ、モンゴル、漢などの諸民族が居住していたが、なかにあって、タランチとトゥンガンは、一八六四年の反亂に對する清朝の報復を恐れたが故に、その相當部分がロシア領に移住した。これら移住者のなかに、ムッラー・ビラールとサイイド・ムハンマドという二人のタランチ詩人が含まれていた。彼らは、一七七一年のロシア軍の侵入に對する抵抗、ロシア領への移住の經緯、移住後の生活の苦しみと望郷の思いなどを、詩に作っている。彼らの作品（「キタービ・ガザート・ダル・ムルキ・チーン」と「シャルヒ・シカスタ・ナーマ」）を紹介しつつ、現在の中ソ國境問題の歴史的背景の一端を明かにしたいと考える。

ハンガイと陰山

吉田順一

北アジア遊牧諸族の君主の根據地は、ハンガイ山脈方面に置かれることが多かった。たとえば匈奴、鮮卑（拓跋部）、モンゴル（アルタン＝ハーン）は陰山山脈方面に根據地を置いたし、突厥、ウイグル、モンゴル（モンゴル帝國）はハンガイ山脈方面に根據地を置いた。柔然もおそらくそうであった。

このようにハンガイと陰山方面が根據地として選ばれた理由は種種あって、それらが總合的に考慮された結果根據地として選ばれ續けたのであろう。私は、そうした理由の一つとして、從來指摘されはしたが具體的説明のなされることのあまりなかった經濟面の理由に焦點を合わせて、この問題を解釋したい。

第一に、ハンガイが森林ステップであることに着目する。陰山も同じく森林ステップであったことを論證する。そしてこの森林ステップがなぜ彼らの經濟にとって重要なのかをのべたい。

第二に、ハンガイと陰山が山であることのもつ意味を考える。この場合モンゴル高原において森林ステップは同時にほとんど山岳地帶であったことにまず意味があり、またその山自體にもいくつかの有利な點のあることをのべたい。

中東現代史とイスラム

加賀谷寛

イラン革命（イランでは「イスラム革命」とよぶ）は中東現代史におけるイスラム復興の勢いを示唆するものと注目されている。中東研究・イスラム研究の現狀をみても、現代イスラムの諸展開の研究は遲れた分野であり、また一國内だけの發展に偏ってきた。

ここに中東のなかで、エジプト、トルコ、イランの三國を同時的

に並べて、その現代史的發展に着目しながら、それぞれの段階の各國に現われた特色ある現代イスラムの展開とその歴史的發展について、相互に對應するかたちで概觀を試みたい。

近代史直前の復古主義的改革（ワッハービーヤ）、一九世紀末の專制批判と反英の民族運動（アフガーニー）、二〇世紀初頭の近代主義改革（アブドゥ）、第一次世界大戰後のロマンティックな民族意識、第二次世界大戰直後のイスラム主義（ムスリム兄弟團）、などの現代イスラムの諸問題を取擧げて、三國間の發展を比較檢討したい。

トルコ、エジプトに比較して社會經濟的發展の遲れたイランでは（C. Issawi）、カージャール朝末からイラン革命にいたるまで、國民が宗教指導者を政治的代表としてたてるパターンがみられる。

西周金文の史料的性格

松丸道雄

西周史研究にとって、もっとも重要な同時史料が青銅器銘文（金文）であることは、言うまでもない。これを對象とした研究は、宋代以來つみ重ねられて、大きな研究領域を形成してきた。

しかし、今、更めて考えてみると、この金文を古文書史料と見做した場合の史料的性格についての究明が、殆どなおざりにされてきたのではないかと考えられる。古文書である以上、まず第一に、それが誰によって誰に對して書かれた文章であるのかを明確にしなくてはならない筈であるにも拘らず、實は充分考察されないまま、曖昧に過されてきたのである。その上で更に、このような考察は、古文書の記載されている青銅器の製作事情そのものとの關連の上でなされるべきであって、その點もまた、殆ど無視されたままできたといってよい。

金文の作文者および器の製作者それぞれが、王―諸侯―臣を主軸とした社會構成のなかで、どのように結びつき、箇々の史料として現存しているのかを見極めることが、史料的性格を確認する最重要事であろう。この點についての見通しについて論じたい。

居延漢簡の集成――文書を中心に

大庭脩

一九七三・四年に甲渠候官、甲渠第四隧、肩水金關の三遺跡の發掘が行なわれて、二萬點近い新居延漢簡が出土したので、漢代の木簡研究の主流である居延漢簡の研究は新生面を開こうとしている。

舊居延漢簡の研究は、いろいろな基準によるグループ化によって、孤簡、斷簡の性格づけと、資料の原型である册書への復原の作業がなされ、〝居延漢簡の集成〟という命題のもとに、森鹿三・永田英正兩教授が、また同樣の目的のもとにマイクル・ローウェー博士が業績をあげられた。

現在殘されている部分は、文書の分類作業である。この作業は、文書簡の書き出しと書き止めの文言、ことに書き止めの文言によって分類ができると思うので、その二・三の作業例をあげ、特に檄書という文書を探ってみたい。